# mantrayāna, mantranaya, vajrayāna

松　長　有　慶

## I

密教をあらわすサンスクリットとして，mantrayāna とか vajrayāna といつた言葉が一般化している。ところがこれらが本来なにを意味するのか，また現在，その本来の意味どおりに一般に使用されているかという点になると，問題がないわけではない。

密教をあらわすサンスクリットには，そのほか数種ある。いずれも意味，内容が明確に区別されないままに，あるいは間違つたままで，一般に定着してしまつているものも少なくない。まず近代の学者の代表的な見解のいくつかを取り上げて，その検討に移ろう。

インド密教学研究の開拓者の一人である B. Bhattāchāryya のこの点に対する説明は，今日ではかならずしも充分であるとはいえない。すなわち密教には，vajrayāna, sahajayāna, kālacakrayāna の三大区分があり，それらの中心となる vajrayāna から，tantrayāna とか mantrayāna とか bhadrayāna といつた個性のはつきりしない種々の細かい yāna が派生したと考える[1]。ところがそれぞれの yāna の特性とか，派生の歴史的な過程についての説明はまつたくなされていない。また各 yāna の名称の典拠が掲げられていないので，原典にさかのぼつて検討する手掛りをつかむこともできない。

同じくインドの密教学者であつても，S. B. Dasgupta の見解は，Bhattāchāryya のそれに比して，派生の順序が逆である。すなわちかれは mantrayāna が tantric buddhism の第一段階に存在して，それから vajrayāna とか kālacakrayāna とか sahajayāna といつた他の支流がおこつたという[2]。

一方，G. Tucci は hīnayāna, mahāyāna に対して，第三の yāna が vajrayāna, mantrayāna, phalayāna, vidhyādharayāna, guhyamantrayāna というようなさま

1) インド密教学序説（密教文化研究所）p. 66, The Cultural Heritage of India, vol. IV. p. 260f.

2) An Introduction to Tāntric Buddhism pp. 60-61.

ざまな名をもつておこつたと主張する[3]。H. von Glasenapp もこの点に関してはほぼ同じ見解を抱いている。vajrayāna とか mantrayāna というのは，hīnayāna, mahāyāna とは比較にならぬ，それらを超えた特別な乗であるという[4]。

これら密教にも造詣の深いインドとかヨーロッパの仏教学者はいずれも mantrayāna, vajrayāna 等の密教を意味する各種のサンスクリットを厳密に使いわけるまでにはいたつていない。またそれぞれの概念の把握にもかなりの混乱がみられる。このような事情を反映して，わが国で著わされた概説書あるいは研究論文においても，無批判にこれらの語を用いた例が多い。たとえば，大日経とか金剛頂経などのインド中期の密教は mantrayāna で，一般に左道密教といわれるインド後期密教は vajrayāna であるといつたように，わが国独自の解釈さえあらわれている[5]。おそらくこの mantrayāna の説明は，わが国の真言宗という名からヒントを得た類推であろうと思われる。だがその根拠は原典は勿論のこと，外国人学者の説の中にも見当らない。

このように密教をあらわすサンスクリットはかなり混乱して用いられている現状であるから，一度それぞれの用法の本義について，原典にたちもどつて検討してみようと思う。

## II

まずそれらのうち mantrayāna の用法の考察から始めよう。チベットの歴史書，あるいはチベット人の著わした注釈書などには，密教をあらわす言葉として sṅags kyi theg pa が，顕教を意味する pha rol tu phyin paḥi theg pa と対にして用いられることが多い。前者は mantrayāna, 後者は pāramitāyāna なるサンスクリットに対応する。このような記述にもとづいて，インドにおいても，顕教である pāramitāyāna に対して，密教 mantrayāna の存在が想定されてきた。ところが，サンスクリット文献もしくはサンスクリットより翻訳されたチベット語文献の古いものには，mantrayāna という言葉はまつたく存在しない。それに代つて mantranaya の用例が少なからず見出される。たとえば H. von Glasenapp が mantrayāna の語の典拠として Guhyasamājatantra 中に指示した個所は，いずれも mantranaya である[6]。かれはその前に mantranaya の言葉も用いている

3) Tibetan Painted Scrolls vol. I, p. 220.

4) Buddhistische Mysterien, S. 21.

5) 仏教史概説インド篇 pp. 112-117 など。

ところから，mantranaya と mantrayāna との間に言葉の区別のあることは知つていたと思われるが，両者をまつたく同一の内容をもつものと考えていたとみてよい。

それでは mantranaya とか mantrayāna という語がはじめて用いられた文献を，どこまで遡及しうるのであろうか。結論から先に述べるならば，mantranaya なる語は，7世紀に成立した大日経の中に求められる。それに比して，mantrayāna という語は，それよりはるかにおくれ，11世紀以後に成立，あるいは著述された文献に散見されるにすぎない。その上，それらはいずれも mantranaya のように，明確な意味をもつて用いられたものではない。それはインド密教の中では，後世にいたるまで独自の概念をもつた言葉として広く用いられるにはいたらなかつたとみてよいであろう。

善無畏・一行訳の大日経の具縁品第二には，真言乗行と真言乗道という言葉が存在する[7]。この真言乗は mantrayāna という原語を指示しているかにみえる。大日経のサンスクリット原典は未発見のため，その原語を直接求めることは不可能である。しかしサンスクリットに比較的忠実な翻訳とされるチベット語訳と照合すれば，この個所はいずれも gsaṅ sṅags spyad tshul となつている[8]。つまりそれをサンスクリットに還元すれば，mantracaryānaya であつて，mantrayāna ではない。さらに大日経には真言道という訳語は多いが[9]，真言乗という語は他にみあたらない。したがつて，この具縁品の漢訳に金剛乗という訳語例が見出されるとしても，それだけをもつて，大日経のサンスクリット原典に，mantrayāna なる語が存在したと断定するには根拠が薄いといわざるをえない。

ジャワで発見された Sang hyang kamahāyānikan という書の序文の中に，大日経具縁品中の14偈半のサンスクリット文の偈頌を引用している[10]。そのうち第1偈に mantravāryanayam vidhim, 第21偈に mantrācāryanayam param という語がある[11]。大日経の漢訳では前者を，真言行道法[12]，後者を勝行真言道[13]と訳

6) Buddhistische Mysterien, S. 21.

7) 大正 vol. 18. p. 5c.

8) 服部融泰校合　蔵文大日経 pp. 56, 57.

9) 大正 vol. 18, pp. 18b, 30c, 37a など。また大日経の系統の儀軌の中には pp. 82b, 125b, 142a などがある。

10) J. S. Speyer: ZDMG 67-2, 1913, S. 347-362, Ein altjavanischer mahāyānistischer Katechismus Sang hyang Kamahāyānikan.

11) 拙稿，大日経の梵文断片について，印仏研 14-2, pp. 140-141.

している。チベット語訳では両者ともに gsaṅ sṅags sphyad (paḥi) thsul となつているから[14]，それらは本来 mantracaryānaya となつていたことがわかる。ここでも mantrayāna ではなく mantranaya 系の表現が用いられている。

8世紀の Buddhaguhya の大日経広釈によれば，所化の衆生のために二種の行があつて，波羅蜜門より入る行と，真言門より入る行とであるという[15]。つまり衆生の機根に応じて，六波羅蜜を行じて正覚にいたる方法と，真言の読誦によつて悟りに入る方法との二種があることになる。このように大乗における行の二分法はずつと後世まで継承されていたらしい。11世紀後半から12世紀初めに輩出した学匠 Advayavajra の Tattvaratnāvalī の中に，mahāyāna が pāramitānaya と mantrananaya とに二分されると説かれ，その内容が説明されていることからも，それは知られる[16]。Advayavajra とほぼ同時代の Ratnākaraśānti の Triyānavyavasthāna においても，同様の分類法を見出すことができる[17]。

インド後期密教の代表聖典である Guhyasamājatantra[18], Hevajratantra[19] にも，mantranaya の語は見出されるが，mantrayāna という表現は存在しない。その他9世紀頃までに成立した基本的なタントラでも mantrayāna なる語は見出せない。この点から，8世紀から9世紀の頃までには，mantrayāna という言葉は出来ていなかつたか，もしくはたとい存在したとしても，それほど重要な意味をもつた言葉であつたとは思えない。ところが11世紀以後に成立した tantra とか論書になると，その中には従来の mantranaya とともに mantrayāna という表現があらわれはじめる。前述のごとく mahāyāna を，pāramitānaya と mantranaya に二分した著述を残している Advayavajra[20] と Ratnākaraśānti[21] 自身が，mantrayāna という言葉をそれぞれ他の著作の中で用いている。さらにまた Kālacakratantra の注釈書である Sekodeśa-ṭīkā 中には，mantrayāna と mantranaya が混在して，

12) 大正 vol. 18. p. 4b.
13) 同 p. 12a.
14) 服部本 pp. 45, 108.
15) 東北 No. 2663, fol. 65a.
16) G. O. S. No. XL, pp. 17–21 及び宇井伯寿博士 大乗仏典の研究 pp. 4, 7 参照。
17) 東北 No. 3712, fol. 101a.
18) G. O. S. No. LIII, pp. 39, 60.
19) Snellgrove ed.: The Hevajra tantra pt III p. 90.
20) Advayavajrasaṃgraha p. 54.
21) 東北 No. 1189, fol. 248a[4]

両方とも用いられているのをみる[22]。

要するに mantrayāna という語は 11 世紀以後に目立つて使われはじめている。しかしその内容についてのくわしい説明はない。現在のところ mantranaya からどのような過程をもつて mantrayāna という語が生まれたのか，それともこの両者はまつたく別な概念であのか，くわしいことは不明である。しかし Advaya-vajra, Ratnākaraśānti が mantranaya というとき，それは pāramitānaya と相対する大乗の実践法の一面である。したがつてそれは一般に考えられるように，hīnayāna, mahāyāna に対して，密教が独特の第三の yāna を形成していたということを意味するものではないことは明らかであろう。

## III

一方 vajrayāna もまた密教をあらわすサンスクリットとして一般に用いられている。ところがその用法の探索を試みれば，それは金剛頂経系の密教にかぎられることがわかる。したがつてこの語をもつて密教全般をあらわすものとみなしたり，インドの後期密教だけに限定して用いることは，いずれもその本来の意味からはずれているといわざるをえない。つまり vajrayāna の本来の意味は，インド中期密教の代表経典であり，瑜伽部密教に属する金剛頂経と，その系統をひく後期密教つまり無上瑜伽密教とを含めた総称ということができる。

以上によつて一般に通用している密教の用語には，誤まつた使われかたをしているものがあることが明らかとなつた。すなわち，日本の顕密の意識に左右されて，pāramitāyāna 顕教に対して，独自の mantrayāna という密教の yāna が存在したとみなすこと，また mantrayāna は大日経，金剛頂経などのインドの純正な密教をさし，vajrayāna は左道密教であるという説，これらはいずれも根拠がない誤つた定説であるといわねばならない。

インド密教についての専門用語には，この他にも典拠が曖昧なものとか，誤まつて用いられたまま定説化したものが少なくない。これらについてもいずれ改めて検討したいと思つている。

22) G. O. S. No. XC, pp. 2, 3.